

古河文化見聞録

古河の文芸活動 ～古河の文学的風土をさぐる～

多くの文学者を輩出し、また多くの文学作品に描かれてきた「文学のまち・古河」。

歴史と文化が重層する古河には、もともと文学的風土があったともいえますが、今回は「文学のまち」を形成した直接的な要因となった、近現代の古河における文芸活動の一端をのぞいてみたいと思います。

『古河郷友会雑誌』創刊

今からちょうど125年前。明治25(1892)年6月、1冊の雑誌が誕生します。

東京で活躍する古河を同郷とする人々が、郷土の発展と人材育成を目的に結成した古河郷友会の機関誌『古河郷友会雑誌』です。

この雑誌では、郷友会の活動報告や郷土情報の他に「論壇」「史林」「文苑」などの欄が設けられ、会員たちによるさまざまな創作が発表されていました。

幕末の古河藩家老・小杉監物の孫で、東京大学から早稲田大学ヘラフカディオ・ハーン(小泉八雲)を招聘、師事した小杉乃帆流も作品を寄稿していた一人です。早稲田大学文学

部卒業後、^{えいか}盈科中学校の教師をつとめるかわら、盛んに詩歌等の作品を発表しました。

さらに、小杉が主宰した地方新聞『北総の実業』(のち『関東タイムス』)の文芸欄には、早稲田大学の同級生だった相馬御風や野尻抱影^{えいし}といった中央文壇で活躍する文学者たちも寄稿し、地方文芸の底上げに一役かっています。また、この頃には、文学愛好者たちの会合もよく開かれていたようです。

『河ぞひ』と文化活動

大正14年1月、俳句仲間だった落合和吉と塚田保蔵が中心となり、矢田挿雲^{やだそうん}、野口雨情、橋本渡川^{とせん}、小杉乃帆流、横瀬夜雨^{やう}といった人々を客員に迎え、『河ぞひ』という同人誌が発刊されます。昭和2年5月まで発行されたこの雑誌は、古河はもとより、近隣の境、結城、下妻、さらには埼玉、栃木、東京などからも多くの同好の士が集う、しかも、俳句、短歌、詩、随筆、小説、戯曲^{ぎきよく}を掲載するいわば総合文芸誌でした。その活動ぶりは当時の



▲古河郷友会雑誌。昭和17年まで51年間・72号が発行された



▲明治44(1911)年4月、藤懸静也と小杉乃帆流の主催により開催された第5回文芸同好会